

# 『浄土真宗聖典全書』ついに刊行（前編）

## — 第二巻「宗祖篇上」 —

### I はじめに

二〇一一（平成二十三）年に親鸞聖人七百五十回大遠忌をお迎えするにあたり、教学伝道研究センターへ本願寺教学伝道研究所——聖典編纂部門——では、

宗門長期振興計画「教学・伝道の振興」の一環として、二〇〇五（平成十七）年度より『浄土真宗聖典全書』（以下「聖典全書」と略称）全六巻の編纂を推進しています。

これまで、聖典編纂部門では『浄土真宗聖典』シリーズ（原典版聖典・註釈版聖典・現代語版聖典）を編纂・刊行してきました。このたびの『聖典全書』は、『浄土真宗のすべての聖教を収め、高い史料性を保持しつつ、領解・伝道に活用できる聖典』を理念に、新しい編纂方針に則り、親鸞聖人の開かれた浄土真宗の教えの理解をさらに深めるため、親鸞聖人が撰述・編纂・書写された聖教をはじめ、經典や論釈、歴代宗主などの聖教、

本願寺の關係史資料など、浄土真宗の教えに関わるすべての聖教を収めています。いわば浄土真宗聖典の「集大成」となる聖典です。

それでは、この『聖典全書』の特徴についてみていきます。

### II 聖典編纂の歩み

本願寺では、江戸時代から親鸞聖人大遠忌の記念事業の一つとして御影堂や阿弥陀堂などの諸堂の再建・修復とともに、浄土真宗における教義の領解や伝道に資するための聖典、または聖教の語句に関する辞書などを刊行してきました。

特に聖典の編纂は、宝曆十一（一七六一）年に勤修されました親鸞聖人五百回大遠忌の記念事業で『真宗法要』六帙三十一帖（明和二「一七六五」年刊）が刊行されています。『真宗法要』が「親鸞聖人から連如上人までの和語の聖教を集めたもの」であったのに対して、このたびの『聖典全書』は「浄土真宗聖典のす

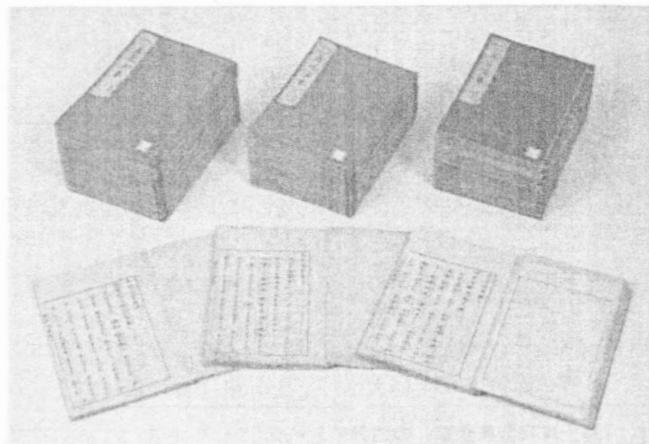


図1 明和2（1765）年に刊行された『真宗法要』31帖

べてを網羅する」という大規模な編纂事業であり、『真宗法要』の刊行以来、実に二百五十年ぶりとなる大事業といえます（図1）。

### Ⅲ 『浄土真宗聖典全書』の構成

『聖典全書』は、次の四部構成とし、六巻立てになります。

- 一、三経七祖篇（一巻）
  - 二、宗 祖 篇（上下二巻）
  - 三、相 伝 篇（上下二巻）
  - 四、補 遺 篇（一巻）
- またその内訳は、次の通りです。

- 一、「阿弥陀仏のみ教えが説かれた根本聖典の浄土三部経とその異訳の経典、浄土真宗の教義の礎となる七高僧の論釈」（三経七祖篇）
  - 二、「浄土真宗のみ教えを開示された親鸞聖人の撰述聖教や言行録、並びに編纂・加点・書写されたもの、及び聖人が尊崇された聖教」（宗祖篇）
  - 三、「親鸞聖人のみ教えを継承された覚如・存覚・蓮如上人などの著述や言行録、並びに敬重された聖教」（相伝篇）
  - 四、「法然聖人の言行録、初期本願寺をはじめとする歴史的価値の高い史資料や聖教」（補遺篇）
- 以上、計百六十を超える聖教と史資料を収録します。

### Ⅳ 『浄土真宗聖典全書』の特徴

i 読みやすく、領解・伝道に活用できる聖典

『聖典全書』は、宗門学校や各種教育機関、安居など真宗学研鑽の場で、「原典の読解・学習」に活用していただける聖典です。『真宗法要』をはじめとして本願寺が刊行してきた聖教の伝統を重んじながら、親鸞聖人、蓮如上人の筆蹟研究など最新の書誌学の成果を盛り込み、親鸞聖人の真筆をすべて網羅するなど、学界等で高い史料的评价をうけている善本を底本・対校本として採用しています。

例えば、和語聖教の『浄土三経往生文類』を翻刻する場合、本願寺蔵である建長七（一二五五）年親鸞聖人真筆本を「略本」系統の底本として採用しています。原本を翻刻しますと図2のようになります。原本の歴史的仮名遣いは踏襲しつつ、片仮名のは平仮名で示

の願果をうるなり。現生に正定聚のくらゐに住して、かならず眞實報土にいたる。これは阿彌陀如來の往相のさとりをひらく。これを「大經」廻向の眞因なるがゆへに、无上涅槃の宗とす。このゆへに大經往生とまふす、また難思議往生とまふすなり。

至心信樂 本願文(大經)言(設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國)

ノ願果ノ欠有、現生正定聚ノ願果ニ任シテ、妻入眞實報土ニ入ル、此何餘院業ノ往相廻向ノ眞因ナリト云ヘ、无上涅槃ノサリシ、ヒラコ、レテ大經ノ宗トス、ヨリト云大經往生トス、一ノ難思議往生トスナリ

至心信樂、本願文、大經言、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國



↑ 『浄土真宗聖典全書』の翻刻イメージ

↑ 親鸞聖人真筆『浄土三経往生文類』(本願寺蔵)

図2 『浄土三経往生文類』(略本)の原本と翻刻

し、濁音符や句読点を付して読みやすく翻刻します。読解に配慮した本文としながらも、基本的には原本に基づいて翻刻していますので、原本の確認もできる「史料性」も保持することになります。

ii 聖教の流伝や異本との違いが一目でわかる「段組」の採用

『浄土三経往生文類』には、大別して文言の大きく異なる二種類の系統が伝わっています。それは建長七年述作の「略本」と呼ばれるものと康元二(一二五七)年述作の「広本」と呼ばれるものです。この広本は、略本を述作した二年後に、略本と「如來二種回向文」を統合整理した内容になっています。このように聖教の伝わり方(流伝)や文言が大きく異なる聖教では、その違いが容易に比較できるようにに段組(上下段または上中下段)にして翻刻しています。『浄土三経往生文類』の場合では、「広本」系統である興正寺藏鎌倉時代伝宗祖真筆本を底本として上段に配し、略本系統である本願寺



図3 『浄土真宗聖典全書』の二段組の翻刻イメージ

本を下段に配して二段組とし、文言の異同、左訓の有無や違いなどがひと目でわかるように工夫しています(図3)。そして、広本と略本のそれぞれの系統の中で、流伝されてきた諸本を対校本として校異をしています。このように二段組で翻刻したものは、ほかに『尊号真像銘文』(正嘉本・建長本)、『唯信鈔文意』(真筆本・正嘉本)などがあります。

また三段組では、「三帖和讃」があり、「文明五年蓮如上人開版本」を上段に、



図4 『浄土真宗聖典全書』の三段組の翻刻イメージ

「高田専修寺蔵国宝本」を中段に、「高田専修寺蔵顕智上人書写本」を下段にそれぞれ配して、二本が対照できるようにしています(図4)。

このように、さまざまな系統の異本が現在に伝わっている聖教も、上下段あるいは上中下の段組として、一層親鸞聖人のお意を領解できるように配慮しています。

その他の聖教についても、本文下欄には対校本との違いを示す校異を載せて、底本との異同、系統の相違などがよく理解できるようにしています。

### V 発刊のお知らせ

六巻立ての『聖典全書』のうち、現在は第二巻目の「宗祖篇上」と第三巻目の「宗祖篇下」、並びに第一巻目の「三経七祖篇」の編纂作業をすすめています。このうち「宗祖篇上」が、来春の三月、ついに刊行することになります。

親鸞聖人が述作された聖教と聖人が尊崇された聖教などを収録した「宗祖篇上」の内容は以下の通りです。「顕浄土真実教行証文類」、「浄土文類聚鈔」、「愚禿鈔」、「入出二門偈頌」、「三帖和讃(浄土和讃、高僧和讃、正像末和讃)」、「上中下三段」、「皇太子聖徳奉讃(七十五首)」、「大日本国粟散王聖徳太子奉讃(百十四首)」、「浄土三経往生文類」(上下二段)、「尊号真像銘文」(上下二段)、「一

念多念文意」、「唯信鈔文意」(上下二段)、「如来二種回向文」、「弥陀如来名号徳」、「親鸞聖人御消息集成(親鸞聖人真筆消息十二通)」、「古写消息六通」、「末灯鈔」、「親鸞聖人御消息集」、「御消息集(善性本)」、「親鸞聖人血脈文集」)、「親鸞聖人小部集I(本尊影像讚文、真筆願文・経文・和讃、経釈要文、大般涅槃経要文、見聞集、淨肉文、曇摩伽菩薩文、須弥四域経文、浄土本縁経文、道綽禪師略伝、烏龍山師并屠兒宝蔵伝、三骨一朝文、信微上人御釈、数名目・十悪、晨旦国十四代)」、「親鸞聖人小部集II(上宮太子御記、親鸞夢記云、四十八誓願、光明寺善導和尚言、往生要集云)」、「恵信尼消息」、「歎異抄」、「唯信鈔」、「自力他力事」、「一念多念分別事」、「後世物語聞書」の四十七の聖教を収めています。

第一弾として、親鸞聖人七百五十回大遠忌法要の記念する年に発刊する「宗祖篇上」(第二巻)にどうぞご期待ください。